

(別紙様式3)

令和2年3月27日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 宮崎市橘通東1丁目9番10号
管理機関名 宮崎県教育委員会
代表者名 日隈 俊郎

令和元年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

- 1 事業の実施期間
2019年 5月 1日(契約締結日)～ 2022年3月31日
- 2 指定校名・類型
学校名 宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校
学校長名 川越 浩
類型 グローカル型
- 3 研究開発名
学校を核とした「共学共創コミュニティ (GIAHS Co-Learning Community)」の形成
- 4 研究開発概要
GIAHS 地域ならではの価値を創造し、地域の未来を切り拓く地域人材(野性味あふれる地球市民)を育成するため、次の3点を軸とした研究開発に取り組む。

(ア) 地域との協働による「共学」の実現

5町村で構成されるフォレストピア構想(1986年,宮崎県),ならびに世界農業遺産(2015年,国連食料農業機関)を基盤としたコンソーシアムを構築し,GIAHS地域で既に取り組まれている諸活動を体系化する。(地域課題研究の協働・実践,GIAHSシンポジウム・中学生サミットの開催,GIAHSスタディーツアーの企画・運営等)

(イ) SGH事業の成果に基づいた「共創」の実現

SGH事業で培った地域課題研究をもとに,3学年では社会実践を伴った活動(マイプロジェクト),4学年では対話から生まれる問いを構造化し,普遍的な探究に繋ぐための哲学的思考ワーク(Gokase-ToK)を新設した「総合的な探究の時間」を実施する。また,多様な人材と

の出会いを通して新たな価値観に気づき、自らの考えを深める機会として、海外フィールドワークや海外人材の受入れ（アジアの架け橋プロジェクト）、英語ディスカッションなど、地域課題研究と明確な関連性を持つ先進的な外国語教育に取り組む。

(ウ) 本事業終了後を見据えた「自走的な仕組み」の実現

将来的に地域協働学習実施支援員として活躍できる地域人材やその資質を有する教職員を養成するための教育プログラム（みやぎき教育魅力化コーディネーター養成コース）を開発する。さらに、学校の取組を宮崎県教育委員会及び高千穂郷・椎葉山地域活性化協議会（以下、GIAHS 協議会）の支援によってさらに強化できるようにする。

5 教育課程の特例の活用の有無

なし

6 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

実施項目	実施期間（2019年5月1日～2020年3月31日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
コンソーシアム		組織		企画 運営委				実務者 会議		企画 運営委		
カリキュラム アドバイザー						海外交流 検討委			担当者 打合せ			報告会 ※中止
地域協働学習 実施支援員	指導 助言			指導 助言		担当者 打合せ	全国 サミット		担当者 打合せ	中学生 サミット		発表会 ※延期
運営指導委員会				運営 指導委					運営 指導委			企業訪問 ※中止
MSEC 協議会		第1回 協議会	合同 発表会	第2回 協議会				第3回 協議会		第4回 協議会		第5回 協議会

※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、3月実施予定の事業は全て中止となった

(2) 実績の説明

①管理機関（コンソーシアム含む）における主体的な取組について

【県教育委員会】

- 「五ヶ瀬中等教育学校に係る検討会」を設置し、教育次長が座長となり、複数の課の担当者や外部の有識者をメンバーとした協議会を設置し、さらなる魅力づくりの取組等について検討を2回行った。
- 「コンソーシアム企画運営会議」を2回実施し、GIAHS 協議会（各町村の教育委員会含む）等、コンソーシアムを構成する各団体の代表者が出会い、指定校の取組への支援、及び GIAHS 地域への還元等を協議した。

- 地域課題研究における指導力に優れた指導教諭の配置を引き続き行った。
- 継続的な取組を行うため、加配（1名）を行った。
- グローバル型における研究の深化、及び海外研修の円滑な実施のため、フィリピン出身で社会学を専門とする ALT を配置した。
- 地域協働事業をはじめとする SSH, SGH 及び SPH 指定校の研究開発を通じて、蓄積された探究型学習のノウハウを県内の高校へ普及すると同時に SDGs の実現を目指す意識の醸成のための組織「みやざき SDGs 教育コンソーシアム（通称 MSEC）を設置した。
- MSEC では 4 回の協議会を実施し、研修会を実施した。
- 「課題研究発表会」を開催し、指定校の取組を教員及び生徒に普及する（3月）。

【GIAHS 協議会】

- GIAHS スタディツアー, 宮崎大学キャンパスツアー, マイプロジェクト GIAHS 合宿, GIAHS ・ユネスコエコパーク中学生サミットの実施
- SNS の活用及び広報誌への記事の掲載

②事業終了後の自走を見据えた取組について

令和元年度からの県新規事業「県立学校を核としたまち・ひと・しごと創生推進事業」の取組と連動させて、継続できるよう計画した。また、GIAHS 協議会の取組と連動させて、継続できるよう調整を行っている。

③高等学校と地域の協働による取組に関する協定文書等の締結状況について

みやざきグローバル人材育成協議会, 総合地球環境学研究所

<補足資料>

ア) コンソーシアムについて

①コンソーシアムの構成団体

高千穂郷椎葉山地域活性化協議会・人材育成プロジェクトチーム	5 町村	担当者 1 名
五ヶ瀬自然学校	理事長	杉田 英治
五ヶ瀬自然エネルギー社中	代表	石井 勇
宮崎大学・世界農業遺産研究グループ	准教授	竹下 伸一
宮崎県立高千穂高等学校（地域協働連携校）	校長	持永 一美

(コンソーシアム企画運営会議会の構成員)

コンソーシアム GIAHS 協議会人材育成プロジェクトチーム	各担当者（5名）
五ヶ瀬自然学校	理事長 杉田 英治
五ヶ瀬自然エネルギー社中	代表 石井 勇
宮崎大学 GIAHS 研究グループ研究員	准教授 竹下 伸一
（宮崎大学農学部森林緑地環境科学科）	
高千穂高校（地域協働連携校）	教諭 吉田 弘志
地域協働学習実施支援員 高千穂町財政課総合政策室	主査 田崎 友教

②活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和元年 5月 1日	コンソーシアムを組織
令和元年 7月 2日	第1回企画運営委員会 ・コンソーシアム構成員に対して、事業内容に関する説明を実施した ・「世界農業遺産の動的保全」に向けた人材育成の重要性を再確認した
令和元年11月18日	世界農業遺産 第2回実務者フォーラムに参加 ・世界農業遺産を活用した活動事例として、本事業における教育活動を報告した ・世界農業遺産の創設者（パルビス氏）と面会し、令和3年度に予定している「FAO本部（国連食糧機関）への中高生訪問」について説明した
令和2年 1月27日	第2回企画運営委員会 ・コンソーシアム構成員に対する事業報告を実施した（海外フィールドワーク研修生による発表を含む） ・ワークショップ「FAO本部への中高生訪問の実現に向けて」を実施し、本事業におけるコンソーシアム全体での目標設定を行った

イ) カリキュラム開発等専門家又は海外交流アドバイザーについて

①指定した人材・雇用形態・高等学校における位置付けについて

グローバルアカデミー 代表 田阪 真之介（都度依頼し謝礼支払い）年3回来校

②活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和元年 9月 7日	担当教員ならびに地域協働学習実施支援員と協議 ・海外フィールドワークの実施体制について（地域協働連携校に所属する生徒の参加を提言）
令和元年 9月18日	本校の海外交流検討委員会に出席 ・次年度に実施予定の「アジア高校生架け橋プロジェクト」の校内体制に関する指導助言
令和元年12月25日	担当教員ならびに地域協働学習実施支援員と協議 ・海外フィールドワークの振り返り ・本地域の小中学生を対象とした留学報告会の企画
令和2年 3月15日	GIAHS 留学報告会 ・海外フィールドワーク及びトビタテ留学 JAPAN の参

	加生徒による留学報告会を実施 ※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、中止
--	---

③海外フィールドワークの設計への関わりについて

今年度12月に実施した海外フィールドワークでは、世界農業遺産に認定されているフィリピン（イフガオ州）を訪問した。研修地の選考に際して、田阪氏より「高千穂郷・椎葉山地域とイフガオ州はいずれも棚田を有しており、研修地として親和性が高い」等の意見があり、決定に至った経緯がある。また、総合地球環境学研究所の阿部健一氏への連絡・調整を行っていただき、同研究所に現地コーディネートを依頼することになった。さらに、高千穂高校（地域協働連携校）の生徒2名を同行にあたっては、参加生徒への支援体制の整備やGIAHS協議会への経済的支援の依頼など、大変ご尽力いただいた。

ウ) 地域協働学習実施支援員について

①指定した人材・雇用形態・高等学校における位置付けについて

高千穂町役場・財政課 総合政策室 田崎 友教（都度依頼し謝金なし）年6回参画

②実施日程・実施内容

日程	内容
令和元年 4月 4日	本校の職員研修に出席 ・世界農業遺産に関する講義ならびに質疑応答を実施
令和元年 4月 19日	本校の総合的な探究の時間（全生徒を対象）に参加 ・世界農業遺産に関する講義ならびに質疑応答を実施
令和元年 7月 16日	本校の総合的な探究の時間（4年・5年）に参加 ・探究活動の中間報告会を参観ならびに指導助言
令和元年 9月 7日	担当教員ならびに海外交流アドバイザーと協議 ・海外フィールドワークの実施内容について （探究活動と接続が可能な世界農業遺産地域の選定）
令和元年 10月 24日	全国サミットに出席 ・ロジックモデルをもとに全国指定校の担当者と協議 （コーディネーター人材とコンソーシアムの在り方）
令和元年 12月 25日	担当教員ならびに海外交流アドバイザーと協議 ・世界農業遺産中学生サミットの運営に関する打合せ ・コンソーシアム企画運営委員会の協議内容の検討
令和2年 1月 25日	世界農業遺産 中学生サミット ・コンソーシアム内にある全ての中学校、高等学校、中等教育学校が一堂に会し、総合的な探究の時間の成果発表を行った ・本校カリキュラムアドバイザーの梶谷教授（東京大学）を招聘し、本校生徒がファシリテーター役を務めながら、ワークショップ「哲学対話」を実施した

令和2年 3月13日	本校の調査研究成果発表会・審査員として出席 ※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、中止
------------	--

③地域協働学習の設計への関わりについて

本校が実施する総合的な探究の時間だけでなく、コンソーシアム内で実施する地域協働に諸活動において、設計・運営に関わっていただいた。本校が田崎氏と協働して設計・運営した主な活動は以下の通りである。

- ・GIAHS スタディツアー (7月)
- ・海外フィールドワーク (12月)
- ・世界農業遺産中学生サミット (1月)
- ・GIAHS 海外留学報告会 (3月) ※中止

エ) 運営指導委員会について

①運営指導委員会の構成員

宮崎国際大学・地域連携センター	副センター長	ウォーカー・ロイド
九州保健福祉大学・薬学部	准教授	甲斐 久博
446株式会社	代表取締役	吉村 優
株式会社新海屋	代表取締役	小川 祐介
宮崎県農政水産部農政企画課・中山間農業振興室	室長	小倉 久典
	主任主事	津隈 祐喜

②活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和元年 7月16日	本校の総合的な探究の時間(4年・5年)を参観
令和元年 7月17日	第1回運営指導委員会 ・令和元年度の事業方針を確認ならびに指導助言
令和元年12月19日	本校の授業研修を参観ならびに職員研修に参加 ・育てたい資質能力について、本校職員と協議 第2回運営指導委員会 ・令和元年度の事業成果を報告ならびに指導助言 ・国際教育の充実に関する協議(留学生の受入れ等)
令和2年 3月 9日	運営指導委員・小川氏が経営する地元企業への訪問 ※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、中止

カ) MSEC 協議会(旧 SSH・SGH 担当者連絡協議会)について

①MSEC 協議会の構成員

「みやざき SDG's 教育コンソーシアム(MSEC)」加盟校14校の担当者

(SSH 指定校, SGH 指定校, 地域との協働による高等学校教育改革推進事業指定校を含む)

※MSEC とは, 探究型学習を県内へ普及し, その学習を通して SDG's の実現に向けて, 郷土を創造・貢献する人材の育成を目的とするコンソーシアムである。

(旧 SSH・SGH 担当者連絡協議会の構成員)

- ・ SSH 指定校における主担当者，MSEC 指定校における主担当者
- ・ 地域との協働による高等学校教育改革推進事業指定校における主担当者
- ・ 科学技術人材育成校における SSH 申請準備主担当者又は課題研究主担当者
- ・ 各校課題研究主担当者の参加希望者

②活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和元年 5月21日	第1回 SSH・SGH 担当者連絡協議会 ・ 各指定校の実践報告ならびに質疑応答
令和元年 6月16日	宮崎科学教育コンソーシアム合同探究活動発表会 ・ SSH, SGH, 地域協働G型指定校の計3校によるポスターセッション発表会
令和元年 7月30日	第2回 SSH・SGH 担当者連絡協議会 ・ グループ別協議による参加校における実践報告
令和元年 11月13日	第3回 MSEC 協議会 ・ SSH 指定校における授業参観及び講話等
令和2年 1月23日	第4回 MSEC 協議会 ・ 各校の状況報告ならびに質疑応答 ・ コンソーシアム「MSEC」に関する協議
令和2年 3月19日	第5回 MSEC 協議会 ・ 次年度実施予定の MSEC フォーラムに関する協議 ※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため，オンライン会議システムにて実施

7 研究開発の実績

(1) 実施日程

実施項目	実施期間 (2019年5月1日 ~ 2020年3月31日)											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
総合的な探究の時間 (全学年で実施)	1回	2回	2回	2回	なし	1回	2回	2回	1回	1回	2回	3回 ※中止
GIAHS シンポジウム (本校・連携校)			打合せ			打合せ		実施	振り返り			
スタディツアー (本校・連携校)		企画会	選考会	実施		振り返り			報告会			
English Day (本校・宮崎大学)	打合せ		打合せ	実施		振り返り						

グローバル探究研修 (前期3年) ※対象外	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
				企画会				打合せ			打合せ	実施 ※延期
海外フィールドワーク (本校・連携校)	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
			企画会	下見		選考会	打合せ		実施	振り返り		報告会 ※中止

※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、3月実施予定の事業は全て中止となった

(2) 実績の説明

①研究開発の内容や地域課題研究の内容について

【2019年度の重点項目】

共学共創コミュニティの形成と環境整備

【実施内容ならびに実績】

(ア) 総合的な探究の時間の実施

- 3学年において、GIAHS 地域をテーマにした実践型プロジェクト（マイプロジェクト）を新設した。自己分析ワークやテーマ設定、SDGsに関する講義を通して、個人のWillと社会のNeedsを繋げながら主体性をもってプロジェクトを実践しようとする生徒が増加し、大きな変容が見られた。
- 4学年において、問いの構造化を目的とした哲学的思考ワーク（哲学対話、国際バカロレア『知の理論』をモデルとした講義ならびに実習）に取り組んだ。これらの活動を通して、探究活動に限らず教科学習の中においても互いに問いかけ合い、課題の本質（ボトルネック）を見出そうとする姿勢が見られるようになった。

(イ) コンソーシアム構成員との協働的な学びの実践

- 4学年において、11月に地元中学校（五ヶ瀬中学校）ならびに地域協働推進連携校（高千穂高校）と「GIAHS シンポジウム」を開催した。探究ワークでは「私たちが暮らす地域における18番目のSDGsを考えよう」に取り組み、GIAHS地域の魅力を共に学ぶ機会となった。
- 5学年において、五ヶ瀬町が総務省より委託されている「関係人口創出拡大事業」の一環として実施された「政策提案コンテスト」に参加した。審査の結果では、卒業生と合わせて6提案が採択され、関係人口創出につながる政策の実現に向けて、自治体ならびに地域NPOの支援を受けながら、現在活動に取り組んでいる。
- GIAHS地域の教育資源を活用した体験型教育プログラム（GIAHSスタディーツアー）を本校ならびに地域協働推進連携校（高千穂高校）の生徒が参加した。本プログラムでは、GIAHS協議会や外部団体（留学フェロシップ）と協働しながら、本校職員だけでなく生徒も企画・運営の一部に関わることによって、より深い学びを生み出すことができた。なお、参加生徒2名ならびに職員1名は12月に滋賀県で行われた研修会に招待され、本プログラムの成果を報告している。

(ウ) 海外フィールドワークの実施

- 4学年（選抜生徒）において、12月にGIAHS認定地域（フィリピン・イフガオ州）における海外フィールドワークを実施した。本事業のアカデミック・アドバイザーを依頼している阿部健一氏（地球環境総合研究所）の御指導のもと、現地高校や大学、NGOの訪問を実現することができた。また、GIAHS協議会の経済的支援によって、地域協働推進

連携校（高千穂高校）の生徒2名も参加し、学校の枠組みを越えて協働的に学ぶ機会となった。以下、今年度実施した研修の行程を記載する。

期 日	行 程
12/ 9	移動（五ヶ瀬～福岡～成田～マニラ）
12/10	移動（マニラ～イフガオ州キアンガン） (1) イフガオ州に関する講義 (CGN:Fhaith)
12/11	(2) キアンガン高校での生徒交流会 (3) イフガオ州立大学での研修（プレゼンテーション，ディスカッション）
12/12	(4) ゴハン高校での生徒交流会（伝統技術に関するワークショップ） (5) バナウエ棚田を散策 ※世界農業遺産認定地域
12/13	移動（イフガオ州キアンガン～マニラ）
12/14	(6) 現地 NGO の視察（ライフビジョンに関するワークショップ）
12/15	移動（マニラ～成田～福岡）
12/16	移動（福岡～五ヶ瀬）

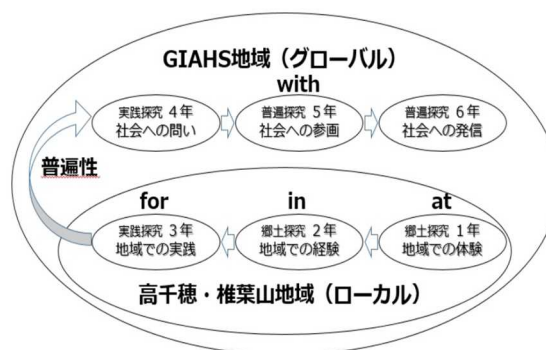
○海外フィールドワークにおける成果は、研修期間内の生徒の変容であり、日々の研修プログラムを経て、生徒の意識や言動、英語でのコミュニケーション能力が目に見えて高まっていることを実感することができた。また、本校が位置する高千穂郷・椎葉山地域と同じ観点で世界農業遺産の認定を受けているイフガオ州を訪問することによって、親和性の高い両地域が抱える課題に目を向けるとともに、それらの解決に取り組む人々との関わり合いを通して、自らの課題研究の目標や意義が深まったと考える。

○研修生8名による報告会について、3月に本校生徒と本地域内の小中学生向けに実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、中止となった。そのため、研修の成果をまとめた報告書や発表 DVD の作成など、他生徒に還元するための手立てを講じる予定である。

②地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け

(ア) 総合的な探究の時間（グローバルフォレストピア探究）の実施

SGH 事業で培った探究活動のノウハウをもとにしながら、「ローカルな問いを深め、普遍的な問いを探究する」ための総合的な探究の時間（グローバルフォレストピア探究）を実施する。地域での体験活動と紐づいた探究的な学習内容を6カ年に適切に位置付けるとともに、各教科・科目と相互に関連させた教科等横断的な学習を計画する。



(イ) 総合的な探究の時間における形成的アセスメントの実施

本事業が掲げる生徒像「野性味あふれる地球市民」の育成に必要な5つの資質・能力（関連づける力、問う力、見る力、試みる力、繋がる力）の獲得を目指して、生徒及び教師が自己評価・客観的評価を行う。評価方法として、ICEモデル(Young and Wilson, 1995)をもとに、独自の評価基準（ICE-Qs）を設定した。

- (1) 学びの場面において「学習者が成長過程のどこにいるのか？」を把握する
- (2) 既定の到達目標・数値との比較ではなく、自己評価を通じて「その生徒は以前と比べ、どれだけ前進したか？」ということをも明らかにする
- (3) ICE-Qsによって明らかになった生徒の変容について、生徒面談等の資料とする

<今年度作成したICE-Qsシート> ※「問う力」のみ掲載（5つの資質・能力全てについて作成）

A. 問う力							
Idea	体験や経験を受け流すことなく、「なぜ？どうやって？」と考えることができる						
Connection	体験や経験を通して生まれた問いについて、自分のことばで周りの人と対話することができる						
Extension	周囲の人との対話や、新しい体験・経験をくりかえすことで、改めて「なぜ？どうやって？」を問い直すことができる						
				I	C	E	
	教科(各教科での学びにおいて)			<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	? 達成できた ところに ?を入れる
	寮生活(寮での学びや行事において)			<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
	GF探求(GF探求活動での学びにおいて)			<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
	学校行事(委員会活動、フォレ祭等)			<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
	課外活動(学校・寮行事以外の校内外の活動)			<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	

- ③地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ、教科等横断的な学習とする取組について

【資質・能力をベースとしたカリキュラム・マネジメント】

- 総合的な探究の時間における6カ年カリキュラムの中に「関連が予想される教科・科目名」を明記した。例えば、数学科では単元「データの分析」において、地域課題研究で取り扱うテーマを教材として、数値処理や相関性を数学的に分析する授業に取り組んでいる。このような取組の成果もあり、全国算数・数学自由研究コンクールや統計・グラフコンクールにおいて優秀な成績を収める生徒が出てきている。
- 本校が10月に実施する授業研修週間では、全ての教科において5つの資質・能力を念頭においた授業設計に取り組み、教科を越えて相互に授業参観する取組を行っている。また、12月に実施した職員研修では、各教科の新学習指導要領に基づいて、5つの資質・能力を再定義する探究ワークに取り組む、全職員での目線合わせを行うことができた。

- ④類型毎の趣旨に応じた取組について

【先進的な英語教育活動の推進】

- 3学年において、これまで取り組んできたイギリス語学研修を「グローバル探究研修」として継続し、3月にオックスフォード大学を訪問して、この1年間で取り組んだ地域課題研究（マイプロジェクト）の概要を英語で発表する予定である。
- 5学年において、宮崎大学・国際連携センターより8名の留学生を招いて「English Day」を実施した。GIAHS協議会が作成したテキストブック（英語版）を活用して、英語科と地歴科が連携しながら事前学習を実施し、GIAHSに関する学術的な理解を深め

る機会を設けた。また、当日は五ヶ瀬町内でのフィールドワークを通して実感した GIAHS 地域の魅力と課題をもとにして、英語ディスカッションに実践するだけでなく、運営に関わる教師を含めた全員が英語で対話することに挑戦し、学校全体で英語コミュニケーション・スキルの向上に取り組むことができた。

⑤成果の普及方法・実績について

島根大学が実施している履修証明プログラム（ふるさと魅力化フロンティア養成コース）をモデルとして、ウェブ会議システムによるオンライン授業を中心としたカリキュラムを開発し、9月より試験的に運用を開始した。県内全域の教職員ならびに教育関係者に案内して、今年度は9名（高校教員7名、大学教員1名、自治体1名）が参加している。なお、オンライン授業では、本事業のカリキュラム・アドバイザーを依頼している岩本 悠氏（地域・教育魅力化プラットフォーム）をはじめ、県内外の教育において活躍する有識者を講師として招き、対話型の探究ワークに取り組んでいる。また、11月には島根大学が主催する「全国地域・教育魅力化フェスタ」のサテライト会場を宮崎大学に設置し、県内教職員を対象とした教育研修会を実施することができた。次年度は、岩本氏が共同代表を務める地域・教育魅力化プラットフォームとの共催を検討しており、本事業の指定校等を巻き込みながら、ICTを活用した教育研修プログラムを県内外に広く発信していく予定である。

(3) 研究開発の実施体制について

①地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制

(ア) フォレストピア検討委員会

各学年コース責任者、研究調査部、前期・後期教頭、地域協働学習実施支援員で構成し、6カ年を見通したグローバルフォレストピア探究の実施内容の検討やカリキュラム改善を行う。週1回の定例会として位置づけられ、全学年の進捗状況を共有する場として必要不可欠な委員会となっている。

(イ) 教科代表者会

各教科の代表者、前期・後期教頭、教務主任、探究主任、進路指導部長で構成し、グローバルフォレストピア探究と教科等横断的な学習の計画や方向性を確認するとともに、探究的な学びに対するアセスメントの役割を担う。今年度は指導教諭も本会に参加し、資質・能力をベースとした探究の議論を交わす場として、有効に機能している。

(ウ) 海外交流検討委員会

研究調査部、前期・後期教頭、事務長、海外交流アドバイザー、教務主任、前期・後期主任、生徒指導部長、寮教育部主任、留学支援担当教員で構成し、本校生徒の海外フィールドワークや海外留学・進学への支援、海外からの留学生受け入れ（アジアの架け橋プロジェクト等）の支援に関する運営・検討を行う。今年度は、学期途中から隔週1回の定例会として位置づけし、主に次年度に予定している留学生受け入れに関する体制作りについて、議論を重ねてきた。

(エ) コア・チーム会議

研究調査部主任，地域協働学習実施支援員，海外交流アドバイザーで構成し，必要に応じて不定期に開催している。本事業の方向性の見直しや新たなアイデアの提言など，テレビ会議を活用して自由に議論を交わす場を設定することによって，本事業を学校に閉じることなく，地域との協働を進める原動力となっている。

②学校全体の研究開発体制について（教師の役割，それを支援する体制について）

研究開発の全般は，研究調査部（４名）が業務を担っている。主に，総合的な探究の時間の計画や運営，評価システムの構築，職員研修の実施に取り組んでおり，管理機関の支援のもとで，本事業を運用することが出来ている。また，本校では前述①のような推進体制が整備されており，小規模校ならではの機動力のある企画・運営が可能である。

③学校長の下で，研究開発の進捗管理を行い，定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ，計画・方法を改善していく仕組みについて

管理職による定期的なフィードバック（学期毎）を設けることによって，本事業の成果の検証や評価が行われている。また，今年度は三菱 UFJ コンサルティングが実施する「魅力化評価システム」を活用し，他指定校と比較しながら，客観的に評価することができた。

④カリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組について

コンソーシアム内の共学共創チームとして，本事業では県外から複数の有識者にカリキュラム・アドバイザーを依頼しており，世界農業遺産と探究活動の紐付けや哲学的思考の活用など，多数の助言を受けることができた。中でも，梶谷真司氏（東京大学）には SGH 指定校時より指導助言をいただいております。本校の教育活動において「問う・聞く・語る・考える」といった考え方が根付いてきた印象がある。『問いつくり』は，総合的な探究の時間と教科学習の橋渡しになる重要な要素だと考えており，今後も継続してカリキュラム開発を進めていきたい。

8 目標の進捗状況，成果，評価

初年度の重点項目「共学共創コミュニティの形成と環境整備」について，概ね達成することができた。SGH 事業で培った 6 年カリキュラムによる総合的な探究の時間の実施を継続しながら，コンソーシアム企画運営委員会を年間 2 回，コンソーシアム構成員との協働事業を年間 5 回（スタディツアー，シンポジウム，関係人口創出拡大事業，海外フィールドワーク，中学生サミット）など，本事業による新たな取組を展開することができた。また，地域課題研究活動を中心に，外部リソース（自治体，大学，地域 NPO）を活用した取組が格段に増加している（3 月末までに目標設定シートで集計予定）。さらに，トビタテ留学 JAPAN への参加者 5 人をはじめ，今年度に短期留学を経験した生徒数が 10 名を越えており，まさに「ローカルからグローバルへ」と眼を向ける生徒を育てている実感がある。海外フィールドワークでは，地域協働推進連携校より 2 名の生徒が参加し，本事業によるグローバルな取組を普及させる 1 歩を踏み出すことができた。このような成果をもとに，次年度は重点項目「総合的な探究の時間の協働的な実践と深化」に向けて，コンソーシアムの組織体制とカリキュラムの見直しを進めたい。

9 次年度以降の課題及び改善点

初年度の実績を踏まえて、今後は自走的にコンソーシアムを運営するための第2ステージへと徐々に移行していかなければならないと考えている。宮崎県では、今年度より県内高校による教育コンソーシアム（MSEC）が設置されており、本事業での成果を県内に広く普及・発信する仕組みとして、その運用についても検討を重ねていかなければならない。

また、最終年度に予定しているプロジェクト「本地域の中高生による国連食糧機関（FAO）への訪問」に向けて、コンソーシアム全体で熟義を進める必要がある。プロジェクトの意義の共有はできており、今後は経済的支援や実行委員会の設置など、コンソーシアム内での組織体制を整備しなければならない。このプロジェクトの実現を中核に据えながら、本事業が目指す「共学共創コミュニティ」の形成を進めていく予定である。

【担当者】

担当課	高校教育課	TEL	0985-26-7033
氏名	山下 亮介	FAX	0985-26-0721
職名	高校教育・学力向上担当 指導主事	e-mail	yamashita-ryosuke@pref.miyazaki.lg.jp